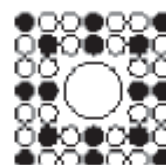


Newsletter of the British Council Japan Association

BCJA Newsletter

No.37

July, 2021



● お知らせ ●

奨学基金への寄付を募ります

BCJA 奨学基金は、BCJA 会員の有志の方々からの寄付金を基盤として、英国留学生の支援活動を着実に進めてきております。今年度も奨学生の募集を行いますので、奨学基金へのご寄付をお願い申し上げます。
(詳しくは、本ニューズレター7 ページをご覧ください。)

募金計画

- ◆ 寄付金額: 一口 5,000 円
- ◆ 口座番号: 00180-0-426794 (ゆうちょ銀行)
- ◆ 加入者名: BCJA 奨学基金
同封の振込用紙をご利用くださいませ。

年会費の納入をお願いします

BCJA 運営のため、年会費の納入をお願いいたします。

納入方法

- ◆ 年会費金額: 2,000 円
- ◆ 口座番号: 00180-0-426794 (ゆうちょ銀行)
- ◆ 加入者名: BCJA 奨学基金
同封の振込用紙をご利用くださいませ。

BCJA 役員および執行部を募集いたします!

BCJA の運営のためにご協力いただける方を随時募集しております。Google グループなどで活動も行ってしておりますので、是非ご連絡ください。

ご連絡先

- ◆ Google グループ URL
<https://groups.google.com/forum/?hl=ja#!forum/bcja-member>

2020 年 BCJA 年活動状況について



BCJA 会長 青柳昌宏

昨年からの未曾有の新型コロナウイルス感染の広がり、多くの方々がお家にこもりがちな生活となっていると推察いたします。最近、高齢者へのワクチンの接種が始まっております。ようやく落ち着きを取り戻してきた感がありますが、BCJA 会員の皆様におかれては、いかがお過ごしでしょうか?

BCJA2020 年度の活動について、ご報告させていただきます。20 年目を迎えた BCJA 奨学金については、コロナ感染リスクが懸念される困難な状況下にも関わらず、例年並みの応募者数となり、その中から、選考委員会により優秀な 5 名の方が選ばれ、英国留学に送り出すことができました。しかしながら奨学金への寄付額については、徐々に減少する傾向にあり、BCJA 奨学金制度を維持するため、寄付金募集の仕組み作り、BCJA 会員数の増加など、地道に取り組んでいく必要があります。幸い BCJA 奨学生独自の OB 組織について、順調に発展しており、定期的会合が英国留学生交流会として開かれております。今後は、奨学金制度が BCJA 奨学生 OB を主体とした運営に徐々に移行していくことを期待しております。なお、総会について、昨年度開催できておりませんが、オンライン開催を含め、今年度の開催を検討しております。

引き続き、よろしくご支援をお願いいたします。

(BCJA 年間活動についてのお問い合わせは、masa_aoyagi5@yahoo.co.jp までお願いいたします。)

2020年度BCJA英国留学奨学金の審査を終えて

——設立20周年に際して一層評価の高い奨学金を目指す

BCJA 英国留学奨学金審査委員会 委員長 白鳥 令

コロナウイルス騒ぎで世界全体が異常な状況にある2020年度も、56名の応募者の中から無事に非常に優秀な5名の方々にBCJA英国留学奨学金を差し上げることが出来ました。審査委員長として大きな喜びを感じますと共に、この奨学金に貴重なご寄付をいただきましたBCJA会員並びにご賛同の方々に、心から感謝申し上げます。

BCJA英国留学奨学金が発足したのは2001年ですから、今年はこの奨学金にとって設立20年の記念すべき年になります。本年の奨学金授与者5名を含め、この20年間の奨学金授与者は総計141名となります。この機会に、この奨学金を提供しているBCJAの組織およびBCJA英国留学奨学金の設立経緯に関して簡単に説明を申し上げたいと思います。

BCJA (British Council Japan Association) は1950年代に設立され、当初は、英国政府の奨学金「British Council Scholarship」を受領して英国の教育研究機関に留学した人々を会員とした親睦団体だったのです。その後、1990年代になり、英国政府が日本を富裕先進国だと判断してBritish Council Scholarshipの適用国から日本を除外する決定を行ったのを契機に、日英両国間の文化的きずなが弱体化するのを危惧してBCJAは組織を改革し、会員資格を英国に留学した経験のあるすべての人々に拡大・開放すると同時に、日英間の学術交流を維持・促進する目的で、BCJA会員からの寄付による英国留学のための奨学金をBritish Councilと提携して2000年に創設、2001年から運用を開始したのです。

現在、審査委員会はBCJA英国留学奨学金受領経験者も含め7名の委員で構成され、委員の全員がすべての応募者の書類を採点した上で合議するかたちで審査を行っています。審査に際しては、専門分野に偏りが無い様に配慮することはもちろんですが、英国滞在中の研究・教育計画の確かさ、語学力、それに将来の社会に対する貢献の可能性等に重点を置いています。

BCJA英国留学奨学金の金額は少ないのですが、この奨学金に対する評価は非常に高く、英国のいくつかの大学で他の奨学金 授与の際の審査の参考とされていることもあって、本年も応募者のレベルは非常に高く、大学教授や社会で活躍をしている芸術家、複数の大学における学部首席卒業生などが含まれています。オクスフォードやケンブリッジでは、奨学金を授与されることは何よりも名誉と考えられ、奨学金の授与が公表された後に金額は辞退することも普通に起こることですが、BCJA英国留学奨学金についても、この2年ほど同じ現象が起こっています。審査委員会としては、これからも、本奨学金を「金額は小さいけれど、授与されることが

名誉な奨学金」として評価の高い奨学金にして行きたいと考えています。

BCJA会員の皆様並びに関係の皆様のご厚情に再度感謝申し上げますと共に、今後ご協力・ご支援のほど伏して お願い申し上げます。

BCJA 英国留学奨学金の寄付の方法

- ◆ 寄付金額： 一口 5,000 円
- ◆ 口座番号： 00180-0-426794 (ゆうちょ銀行)
- ◆ 加入者名： BCJA 奨学基金

2020年度奨学金授与者リスト

氏名	出身校/所属	留学先	分野
田形愛美	愛媛大学医学部	London School of Hygiene & Tropical Medicine, Taught Masters - Tropical Medicine & International Health	内科学、感染症内科学、感染制御学、公衆衛生学
伊佐治哲大	University of Oxford (BA in Music)	University of Cambridge, Master of Philosophy in Music	音楽学(18世紀鍵盤楽器)
有馬千裕	中央大学法学部	University of Bradford, MA Advanced Practice in Peace Building and Conflict Resolution	平和構築・紛争解決
貞升彩	岐阜大学医学部	Cardiff Metropolitan University, MA Sociology and Ethics of Sport	整形外科、スポーツ医学、スポーツ倫理(主にジェンダー学)
森海渡	東京大学法学部	University of Oxford, MSc in Law and Finance	法学、金融論
菅野芳明	東京大学医学部	London School of Hygiene & Tropical Medicine, Taught Masters - Tropical Medicine & International Health	熱帯医学と国際保健

貞升彩氏は、英国のCardiff Metropolitan Universityではなく、Erasmus Mundus Joint Master of Arts in Sports Ethics and Integrity (MAiSI)という、欧州委員会が運営するチェコなど複数のEU加盟国の大学院で授業が行われるコースに進学することになり、BCJA英国留学奨学金を辞退されました。

2019年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

留学レポート

澁谷 聡一

はじめに

2019年度奨学生の澁谷聡一です。2019年の1月より University College London (UCL) 付属の Great Ormond Street Institute of Child Health へ留学し、現在も PostDoc として研究を継続しています。小児外科医として臨床勤務をする中、手術が滞りなく行われたとしても救命が困難な症例や、長期合併症を抱え不自由な生活を余儀なくされる患者さんに出会い、解決方法を模索する中で再生医療に興味を持つようになりました。歴史ある小児病院として有名な Great Ormond Street Hospital (GOSH) は小児難病に対する新規治療を研究する施設として Institute of Child Health を併設しており、同施設の Paolo De Coppi ラボは再生医療研究の臨床適応を小児外科領域において牽引していました。再生医療の手法を学ぶことにより自身の将来の研究へと結びつけたいと思い、同研究室への留学を決断しました。基礎科学研究者としての背景に乏しく奨学金への応募条件も限られる中、BCJA からの援助を頂けたことは大きな励みとなりました。心から感謝申し上げます。



写真1: ガラス張りの Zayed Centre for Research into Rare Disease in Children

研究内容

『再生医療に基づいた小児へ移植可能な食道グラフトの作成』が研究主題であり、主に先天性食道閉鎖症という先天性疾患に対する新規治療としての臨床適応を目標としています。同疾患は10,000出生に1人の確率で発生する比較的稀な先天性疾患であり、胎児期の発生障害により食道が連続性を欠いているため、出生後まもなく食道と食道を吻合する手術が必要となります。吻合する両端の距離が短い症

例は一次的に吻合が可能であり、大きな合併症が残ることは比較的稀であります。両端が著しく離れている“long-gap”と言われる症例は術後に縫合不全が発生する危険性が高く、さらに一次的吻合が困難な症例では胃や小腸による置換術が必要となることもあります。新生児治療の進歩で救命率は大きく改善したにもかかわらず“long-gap”症例は初期治療にも依然として難を要し、退院後も長期的な摂食障害や発育不全に苛まれる患児も多いため、有効な新規治療の開発が望まれています。同疾患に対して直接的な吻合の代わりにグラフトを移植するという手法は古くから研究されていますが、多くは生体適合性に乏しい人工素材を用いた方法であるため、グラフトの脱落や狭窄が避け難く良好な成績は示されていませんでした。近年、再生医療研究のめざましい進展により、幹細胞を用いて組織を再生する方法が注目を集めるようになりました。幹細胞(stem cell)とは自己増殖能と多種の細胞への分化能を有する細胞と定義されており、適切な環境で増殖、分化させることにより、様々な組織を作り出すことが可能な細胞です。その一つである受精卵は理論上、一つの細胞から胎盤を含めた完全な人間を構成することができるので、言うなれば究極の幹細胞です。当初、受精卵から分化して間もない細胞(胚幹細胞)のみが幹細胞として認識されていたため、それらを用いた研究は倫理面での問題がありましたが、皮膚細胞のような成熟した細胞から幹細胞を誘導する induced pluripotent stem cell (iPSC) 技術の登場により、受精卵を犠牲にすることが避けられるだけでなく、患者と同じ DNA を持った幹細胞(自家幹細胞)を得ることも可能になり、同分野の研究が急速に進みました。近年は細胞の発現する遺伝子情報を詳細に調べることができる RNA sequencing 技術などの普及により、成熟した臓器内(皮膚、筋肉、小腸など)に存在する幹細胞(somatic stem cells)や、狭義の幹細胞の定義からは外れるものの、複数の成熟細胞に分化することができる多能細胞(multipotent cells)の働きが明らかになってきており、幹細胞から成熟した体細胞まで広がる細胞の分類は増殖分化能を軸としたスペクトラムとして捉えられるようになりました。

我々は筋肉組織の中に含まれる中血管芽細胞(mesoangioblast: MAB) という細胞に注目し、同細胞を用いた食道グラフトの作成を研究しています。我々が同細胞に注目した理由は主に二つあり、①少量の筋細胞から細胞を得ることができるので、臨床現場にも容易に応用することができる。②自然に筋細胞へ分化する能力を有しており、TGF- β という成長因子を加えることによって平滑筋細胞と誘導することができる。という点です。事実、デュシェンヌ型筋ジストロフィー症に対する新規治療として、MAB の細胞移植が研究されています。食道は消化管でありながら消化吸収の機能はなく、食物を胃に運ぶことが主要な働きです。心臓、大血管や肺といった重要臓器に囲まれた縦隔と呼ばれる狭い空間に食物を通過させるために食道へ求められるのは柔軟性と弾力性であり、その為に食道壁は平滑筋によって構成される必要があります。その目的に対して平滑筋へと容易に分

化誘導されることができる MAB の特徴が優位に働きます。また、古典的にはシート状に培養した細胞を筒状にしてグラフトを作成するという手法が用いられていましたが、グラフトの強度に関して問題が生じるため、近年は 3D プリンターなどを用いて立体的な細胞培養をすることが主流になってきています。我々の研究室は人工的な素材ではなく、動物の臓器を脱細胞することによって得られた足場組織に細胞を移植、培養するという手法を確立させました。具体的には豚から摘出した食道を洗浄液と酵素で還流することで細胞を除去し、主にコラーゲンなどのタンパク質で構成される細胞外マトリックスのみを残します。細胞外マトリックスは微細な三次元構造を保持しているのみならず、臓器特有の成長因子をも含んでいるため、移植された未熟細胞が臓器に適した成熟細胞へと分化するのを助けると考えられます。脱細胞化が適切に行われると拒絶反応を誘発する免疫抗原も除去されるので、豚から摘出された臓器でありながら、ヒトに移植した際も免疫抑制剤を必要としない理想的な足場となります。これまで既に *in vitro* では良好な結果が得られており、次の段階として、豚へ外科的に移植を行い長期的な予後を調べる動物実験を計画しております。そちらで安全性を証明することができれば臨床適応に向けた大きな一歩になるので、非常に楽しみです。

英国における研究者の立場

英国において研究をする中でいくつか新鮮に感じることはありませんでしたので、少し述べさせていただきます。まず研究費の獲得に関してですが、日本は政府の主導する科研費が医科学分野での大きな資金源になりますが、英国には UK Research and Innovation (UKRI) を代表とする公的な資金源に加えて、Wellcome Trust や Cancer Research UK といったチャリティーによる研究費も豊富です。また、研究者の給与が非営利の患者団体による奨学金制度で賄われることも稀ではありません。もちろんいずれも競争的ですので実際に資金を獲得できるかは別ですが、研究者は資金源を求める機会に恵まれていると感じます。コロナウイルスのワクチン開発に対して早々に政府が Oxford 大学を含む複数の研究チームに多額の研究投資をし、共同研究を促したことも印象的でした。日本にも BCJA のような若手研究者を支援する団体が増えて欲しいと思いますが、日本における研究資金の流れは大学における基礎的な科学研究に対する補助よりも企業単位での技術研究投資のほうが主なのでしょうか。これらの研究補助金の流れに関しては自身が日本に戻ってからもっと詳しく調べてみたいと感じています。研究施設に関しても興味深い部分があります。我々が勤務する Zayed Centre for Research into Rare Disease in Children (ZCR) という施設は去年、パンデミックの最中に完成し Institute of Child Health の旧施設から我々を含め多数の研究チームが移籍をしました。同施設は臨床との橋渡しの研究をするという目的もあり、GOSH の循環器外来棟と連結しています。また、建物が全面ガラス張りであるため、受診にきた患者さんだけでなく通り

を通過する人々からも研究者の動きが観察できるようなデザインになっています。実際、実験中に歩道を歩く子供から手を振られることも多々あり、不思議な気分になります。設立資金は GOSH のチャリティーに加え、アラブ首長国連邦の初代大統領でもあった Sheikh Zayed 氏の意向により、奥さんから寛大な寄付がありました(施設名称の由来になっています)。同じくロンドンにあり、UCL の関連施設である The Francis Crick Institute は前述の公的、チャリティーの資金提供機関に加え、UCL、Imperial College London、King's College London の三大学が共同出資して作られた施設です。施設の名称は University of Cambridge で研究に DNA のらせん構造を解明し、Harvard University の James Watson 博士と King's College London の Maurice Wilkins 博士と共にノーベル賞を受賞した Francis Crick 博士の名を冠しており、大学の垣根を越えた共同研究で革新的な発見をすることに重きを置いています。これらの施設の理念に伺いとれる研究の透明性や共同研究促進の概念は、インターネットの普及により世界が狭くなった近年における重要な傾向であり、今後、自身が研究を継続していく上で軸に据えるべき考え方だと感じています。

ロンドンでの生活

私は学生の頃よりイギリス発の文化(音楽、ファッション、映画 etc)に傾倒してきたので、研究をすることに加えてロンドンで暮らすというのは兼ねてからの憧れでありました。もちろん想像していた通りの部分もありますが、実際に暮らしてみることによって知り、驚かされたことが多々ありました。その中でも印象的で自身がロンドンのことをさらに好きになる要因となったものは人々及び文化の多様性です。私が暮らす St. John's Wood という地区は The Beatles のアルバムでも有名な Abbey Road Studios があり、Primrose Hill へと続く東側は高級な住宅街ですが、自宅のある南西へ向かうにつれて様々な背景の人々が暮らす地区になります。町にはもちろん教会もあるのですが、その徒歩圏内にユダヤ教のシナゴークやロンドン最大のイスラム教モスクである London Central Mosque が共存しています。安息日には礼拝に参加するユダヤ人父子の姿が見られ、ラマダンの終わりには多数のイスラム教徒がモスクに集合するのが恒例となっています。市内を散策するとそれぞれの文化に合わせた食材を扱うスーパーマーケット(日本食を含め)を見つけることができ、レストランやマーケットの屋台を巡れば、ロンドンにいながらましく世界中の料理、分化を味わうことができます。天気の良い日に Hyde Park などに行くと、様々な人種の人々がそれぞれに憩いの時間を過ごしており、世界中のあらゆる国から人が集まって来ているのだなと感じます。この感覚は東京で暮らしていても感じることもなかったものであり、日本では馴染みの薄い国の人々との交流は、日本や英国だけでなく世界中で起こっている様々な問題に対して関心を持つきっかけになりました。また、自国に対する考え方や宗教観に関して議論する機会も多く、日本ではあまり深く考えることのなか

った自身の人種、国籍に関しても思考を改めるようになりました。

日本人との出会いもロンドンにきて良かったと感じる要因の一つです。ロンドンに暮らす日本人は比較的多いので幸い、コミュニティを通じて色々な人と出会うことができます。自身と類似する立場である日本人研究者の方々とは深遠な意見の交換ができることに加え、研究や生活の苦労も共有することができるため大きな励みです。また、日本ではあまり恵まれなかった医療や研究分野以外の人たちと出会う機会もあり、分野が違えど、日本を離れて勝負している仲間たちとの交流は自身の価値観を広げる最良の機会であり、大きな刺激となっています。また、幸運にも同時期の BCJA 奨学金授与者の清水さん、副島さん、曾我さんとも連絡を取り合っ て食事をする機会もあり、非常に興味深いお話を聞かせていただきました。これはまさしく BCJA の奨学生へ選出していただいたことによる賜物です。

私は 2022 年 3 月までこちらでの研究を継続し、帰国する予定です。与えていただいた機会のできるだけのことを吸収し、医科学の発展に貢献できるよう精進して参ります。自身も将来的には、若手の研究者が英国へ留学し貴重な経験ができるよう支援する立場になればと願います。引き続きよろしくお願ひ申し上げます。



写真2: 留学して間もない頃、同僚たちと大学近くの公園で

(2019 年度 BCJA 奨学生 University College London)

2019 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

留学レポート

曾我 英子

はじめに

2018 年より、オックスフォード大学ラスキンスクールオブア

ートでの博士課程にて、研究を行なっています。BCJA 様のサポートをいただくことで、より研究活動に集中し継続することができました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

研究内容

本研究は北海道様似町にてアイヌ料理を学ぶことを通して、自然と人間社会の関係性を学び、オックスフォードでの研究成果に反映していきます。その中で、人の体感や感情が、社会を作る要素の大切な一部としてどのように他者と響き合っているのか、芸術を通して可視化する事を探求します。伝統的なアイヌの食は、料理だけでなく、食材となる山菜や陸海空の動物がどのように自然の中で生きているのかという理解や、自然を循環させ続ける知識と経験が大切だったと言われています。自然と人間の共生は、目の前にいる生物に対する感謝と謙虚な心が重要だと、アイヌの人々から教えていただきました。

そこで、世界が直面する自然環境問題を抱えた現代で、人が人間らしく自然と調和をとるといったことはどういったことなのか問います。自然の生き物と人々の相互的な関係と社会作りは、地球上の人類共通の課題です。現代と未来で一層深まるために必要な価値観を、アートの視点から探考し提示します。



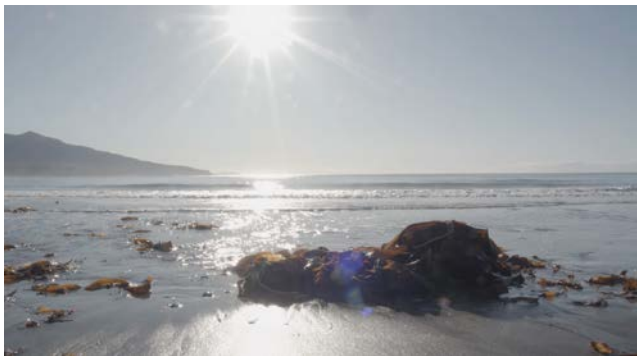
熊谷カネさんからコンブシト作りを習っている様子

経過報告

研究の問いや表現方法を探るために、四季折々の様似アイヌ料理をアイヌ女性の熊谷かねさんから学びながら、約7ヶ月に渡りフィールドワークを行いました。熊谷さんは、様似アイヌ文化の最後の伝承者の一人だと言われています。まずは様似町の人々の営みと自然環境に着目し、料理を軸にアイヌ文化への理解を深めました。それは、近代化した日本社会が発展を求めることで、失った事柄、得たもの、取り戻すべき事柄へのヒントとなりました。また、熊谷さんの様似アイヌの食の記録を一つの重要な課題としてきました。

アイヌ料理は、「長い年月をかけて自然法則と向き合いながら暮らす中で培ってきたアイヌ文化だ」と学びました。そこには、自然社会に対する敬意を表現する幾つもの儀礼と、日々の行いが育まれていました。しかし、現代社会では、世界的に感謝がなくてもお金があれば生きていける現状になり

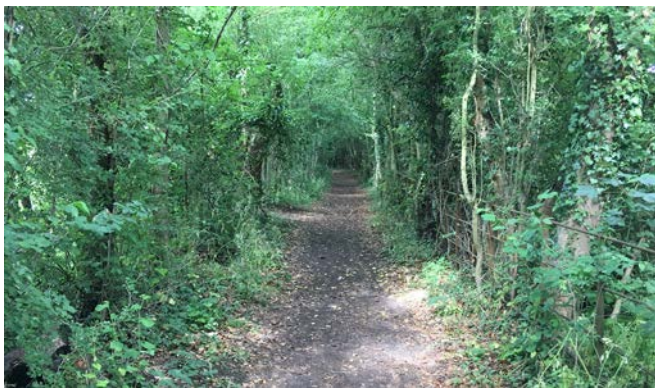
ました。そんな中、ゆっくりと人や自然に耳を傾け、自然の中で生かされている人間としての感謝の意識も持ちながら伝統を守り、熊谷さんは現代社会とバランスをとりながら日常を過ごされていました。日本人である私がアイヌ文化を理解するために、「日々の中で得る共感と疑問」を重要な研究要素とし、アイヌ料理、様似のアイヌ文化、自然や社会環境を自ら体験しました。多くの学びと発見を得ると共に、人と人、人と自然生物を繋ぐ要素を理解するにも、資本主義を基盤とした近代価値観では理解することが困難で、複雑な社会の問題に直面しました。現在はフィールドワークを終えて、研究結果をまとめる作業の準備をしているところです。



様似町は、昆布をはじめ、豊かで貴重な自然で溢れていました

オックスフォードでの生活

フィールドワークを始める直前にコロナウィルスの影響で、自粛期間を要請されました。それまでは、オックスフォード市内にあるラスキンスクールのアトリエで、フィールドワークの準備をしていました。準備の一環として、人の心情と自然環境がどのように響き合っているのかを、映像や詩的な言語を使ってどの様に表現できるか実験していました。大学の講義だけではなく、教授や学生の仲間と議論を通して深めることに努めました。アートの分野だけではなく、人類学、歴史、音楽、地理、脳科学などの幅広い分野の研究者との交流の中でも育むことができました。



大学の公園ですが、不思議の国のアリスが誕生した町だということ
をしみじみと感じる場所です

オックスフォードは30分も歩けば、行きたいところは大抵

辿り着くことができます。ですので、町の中で他の研究者や教授にばったりと会い立ち話をするのもしばしばあり、自分の生活や研究に役立つことが多く、そこがオックスフォードらしい醍醐味です。公園や自然環境にも恵まれていますので、仕事や研究の合間にコーヒーを片手に散歩をすることが癒しとなりました。コロナの影響で大学の環境は大きく変わりましたが、仲間の大切さと繋がりが変わることはありませんでした。自分が現在行なっている研究が、今後の地球環境や社会環境の向上につながる様に、努力を続けていきます最後まで私の報告をお読みいただき、ありがとうございました。

(2019年度 BCJA 奨学生 University of Oxford)

2019年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

激動のロンドン留学を振り返って

清水一紀

はじめに

東アジア・東南アジア地域での SARS の流行を機に、保健課題が社会に与える甚大な影響を対岸の日本から目にした私は、「人の命を救うことに国境はない、そしてその活動に直接携わりたい」との思いを胸に、医学の道を志した。平和維持活動下の東ティモールでの乳幼児栄養不良問題の要因探索、ナミビアでの途上国の保健システム改善プロセスに携わったことから、危機に強いシステム作りには、平時の整備と危機下における surge capacity の両要素が不可欠なことを学び、「危機管理」に強い関心を抱いた。大学卒業後、日本・アメリカ・タイの臨床現場の最前線で、人の命が不平等な状態に置かれ、社会そのものが病んでいる状況に直面すると共に、時に現状を看過し、思考停止に陥りがちな現場への「怒り」は、私をグローバル・ヘルス領域へと突き動かした。

近年、災害や紛争、経済危機等の「人間の安全保障」に対する脅威が山積する中、様々な新興・再興感染症の世界的流行の頻繁な発生は、公衆衛生課題がまさに安全保障課題であることを世界に認識させた。西アフリカにおけるエボラ出血熱アウトブレイクの制御に際し、世界的な財政政策、資源の動員が必要とされるなか、医学や公衆衛生学の枠にとられない社会科学・自然科学双方に精通し、法律・政治・経済・国際開発等様々な観点を身に付けた人材が求められると、私は確信した。そこで、ロンドン大学熱帯公衆衛生大学院 (LSHTM: London School of Hygiene and Tropical Medicine) およびロンドン・スクール・オブ・エコノミクス (LSE: London School of Economics) のジョイントプログラムである「保健政策・計画・財政」の修士課程 (MSc Health Policy, Planning and Financing) への進学を決断した。

LSE/LSHTM での学び

公衆衛生学研究で世界トップレベルのLSHTMと、社会科学で世界トップレベルのLSEの両方の教授陣から、保健政策について分野横断的な学びを得た。Global Health Security 分野における第一人者を目指す私にとって、大変魅力的な課程であった。

LSEでは、国際保健政策の要諦となる外交・安全保障・保健財政等について学びを深めた。特に、医師・医療経済学者、また過去にギリシャ政府で大臣経験を持つElias Mossialos教授のレクチャーは、毎週白熱したものであり、保健財政の理論と実践の差異、政治家や行政官等、意思決定者にいかに科学的知見を提示し、インプットを行い、政策に反映させていくかの実践的なプロセスについて、多くを学び取った。光栄なことに、COVID-19関連の論考を共同で執筆する機会にも恵まれた。同時に、ロックダウンに伴って生じた心理的・社会的影響、教育分野への影響に関する17ヶ国語での研究調査のサポートに携わった。

一方、LSHTMでは疫学・統計に関する体系的な学びを深めながら、健康の社会的要因という切り口を通して、世界をリードするイギリスの視点で公衆衛生課題を捉えた。また、LSHTMの学生大使(student ambassador)に就任し、Open Dayの運営等に携わった。さらに、COVID-19パンデミック初期に執筆した短報に関連し、Peter Piot学長より直々の依頼を受け、LSHTMが創設したCOVID-19関連のポッドキャストLSHTM Viralに、スピーカーの一員として参加した。LSHTM Viralは、後に、2021 CASE Excellence Awards for Digital Communications - Podcastの金賞を受賞したが、錚々たる教員の中、学生として多少なりとも貢献できたことは、自身にとっての財産となった。

COVID-19の影響で、2020年3月中旬以降の授業はオンラインへ移行し、対面でのレクチャー・セミナーの受講は不可能となった。しかし、COVID-19関連では、LSHTM rapid data projectに参加し、定期的に各国のデータ更新等の作業に従事した(後に、プロジェクトがCouncil for Advancement and Support of Education Circle of Excellence Awardを受賞した)。

研究内容

COVID-19で明らかになったように、感染症は、今なお人類にとっての脅威であり続ける。現に、脆弱な保健システムは圧倒され、疾病予防・診断・治療が困難になった。しかし、公衆衛生ニーズに合わせた投資が実現されているかについての研究は限定的であったことから、修士論文として、エボラ出血熱の影響を受けた国々において、保健分野への開発援助と各疾患の疾病負荷がどの程度の整合性を持ち合わせているかを分析し、感染症アウトブレイクを経験した国家において、特定の感染症とそれ以外の疾患について、疾病負荷に応じた開発援助が達成されているかを探索した。危機以前における不均等な資金配分は健康危機下におけるリスク要因となることから、下記の教訓を得た。

- (1) 健康開発支援と疾病負荷データを用いて資源配分の優先順位付けを行う意思決定プロセスの導入
- (2) 危機前および危機下のいずれにおいても、Sub-populationに応じた保健医療需要に基づく十分かつ適切な資源配分
- (3) 健康危機下におけるリアルタイムでの対応考察およびその修正

ロンドン生活

大学院生のみを対象とする民間の学生寮(Goodenough College)で1年を過ごした。ロンドンの中心街で、両校からも徒歩圏内という、絶好の立地であった。また、世界各国からロンドンに学びを深めに来た学生同士の交流は、大学院で得られる実地スキルやネットワークに留まらない財産となった。

2019年11月には、King's College Londonで世界保健機関年次総会をシミュレーションしたワークショップ(テーマ:紛争と健康)に、加盟国代表として参加した。各国・各地域・各組織間の利害関係を考慮し、妥協点を探る作業は、良い刺激になった。また、大学院から徒歩圏内に大英博物館があり、頻りに足を運んだ他、休日には、ハイド・パークやリージェント・パーク等で自然に触れることができた。一方、2019年11月下旬のロンドン橋の襲撃事件等、国際都市ロンドンの脆弱な部分も垣間見た他、2019年12月には総選挙が行われ、イギリスがBrexitへ進む決断を下す瞬間を、多くの同世代とじっくり見守った。

2020年3月中旬以降、街の様子は一変した。しかし、パンデミック下にロンドンで生活することに大きな不安は感じなかった。公衆衛生用語でcommunity engagementという表現があるが、まさにコミュニティが一体となり危機を乗り切ろうとする姿は、日本の医療の最前線に立ち続ける旧知の友人が直面した社会的偏見・差別とは大きく異なるものであった。それは、医療者として、そして公衆衛生を学ぶ者として、危機下における責務とは何かを考え続ける契機となった。

今後に向けて

未曾有のパンデミックを引き起こしたCOVID-19は、感染症対策を含む公衆衛生分野への物的・人的投資がいかに重要かという命題を世界に投げかけた。世界的なリーダーシップの不在、ガバナンスの劣化等が顕著になった今、外部性をもたらす課題に対し、科学が政治を先導できるシステム作りは、今後、世界が気候変動問題等に立ち向かうにあたって、喫緊の課題である。また、各国が自国優先の姿勢を崩せない状況が続くが、国際協調なしにパンデミックの終焉は迎えられない。今回、パンデミック発生時にイギリスで保健政策を学んでいたことは、世界の健康危機対策を先導するアカデミアの底力を実感できた点で、有益であった。

感染症のリスクへの対応は、保健医療分野のみならず、開発分野や社会的なアジェンダを内包している。特に、健康危機管理における適切な保健財政の在り方については、

世界の英知を結集し、知恵を出し合い、より良き戦略・マイクロプランニング立案を実施することが重要となる。今後数年は、開発途上国の最前線で COVID-19 を含む健康危機対策に従事し、保健システム強化および感染症の制御・排除・撲滅に全力を注ぐが、近い将来、よりマクロな視点で、魎魅魍魎のグローバルな舞台でルール・メイキングに携わることを切望している。大学院留学中に築き上げたネットワークやスキルを最大限活用しながら、最終的な着地点を見失うことなく、キャリア選択していきたい。

最後になりましたが、BCJA 奨学生として 1 年間サポートしてくださり、心からお礼申し上げます。深く感謝の気持ちを込め、本稿を擱筆いたします。

(2019 年度 BCJA 奨学生、London School of Economics and Political Science, London School of Hygiene and Tropical Medicine)

2019 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

BCJA 留学レポート

副島しのぶ

はじめに

ご存知の通り、2019 年は世界的にその後大流行する感染症が最初に確認された衝撃的な年でした。今日まで続く混乱を思うと決して喜ぶことはできませんが、私たち 2019 年度の BCJA 奨学生はコロナ禍が広まる前に英国に旅立ち、現地で実際に多くの人々と触れ合い学ぶことが叶った非常に幸運な年に巡り合わせたと言わざるおえません。留学に先立ち、BCJA という大変栄誉ある奨学生として選出され後押しをいただいたおかげで、留学中は研究活動に十分専念することができたこと、選出いただいた選考委員の方々ならびに BCJA 会員の皆様には、心よりお礼申し上げます。

留学に至った理由

普段、私は立体アニメーションを使った短編映画や現代美術としての映像作品を制作し、国内外の映画祭や美術展覧会を中心に発表しています。2019 年初頭は東京藝術大学大学院アニメーション専攻修士課程に在籍しながら、新作の短編映画「鬼とやなり」(2019)のプレミア上映を終えた所でした。国内外の映画祭や美術展で発表する中、映画祭や美術展で特に高い評価を得ている作家達の成功はいずれも、独自の表現技法と彼らの育った出身地に由来した民族性や、それぞれの国の問題意識を積極的に物語のテーマに取り入れた結果ではないのだろうかと感じ、私自身も作品の更なる成熟を目指すために留学に至りました。

元々、立体アニメーションはチェコ共和国 (旧チェコスロバキア) 周辺で人形劇の派生として表現であり、今でも多くの

制作スタジオや作家達は欧州に集中しています。そのため、立体アニメーション作品の多くは、少なからずともこの西洋の伝統的な人形劇の影響を受けており、今でも多くの作品は人形やマテリアル、題材に至っても西洋的の影響が強いことに危機感を覚えていました。日本においても、これまで川本喜八郎など能や浄瑠璃人形劇など伝統芸能を踏襲した立体アニメーション表現が開拓された過去があるものの、その様な日本・アジア独自の立体アニメーション表現は、3D アニメーションの到来と共に下火になっていると言わざる終えません。アジア独自の立体アニメーション表現への開拓のためにも、世界の立体アニメーションの中心となっているイギリスに赴き、まずその高い技法を実践的に研究し基礎的技術面を学んだ上で、ロンドンと言う様々な国からアーティストが集結する国際都市で、どのように欧州の高い技術とアジアの民族性を取り入れた独自の表現を編み出せるか、その研究をするために RCA (Royal College of Art) の Post Experimental Programme へと留学に至りました。

研究内容

研究内容としては、英国や周辺国の立体アニメーションの作家が独自に編み出したアニメーション技法と、その手法による立体アニメーションならではの映画表現について、作家へのインタビューや制作現場の見学を通じた実践的な研究、及び研究の最終成果物として作品の一つ滞在中に完成させ発表させることでした。特に、RCA 出身の監督でありアカデミー受賞作家であるスージー・テンプレトンの学生時代の作品を研究対象とし、彼女のアニメーション技術 (その技術は長年アニメーション界の中でも謎とされてきたもの) を実際に自分の手で再現することで、物語への影響や映画の演出効果を探りました。テンプレトンの作風の強みは「目」の表現にあり、登場する人形は、まるで本当に魂を持って生きているかのように誰しも錯覚する威力があります。しかし、実際にはテンプレトンの人形の顔の造形は作中で一切変わらず、言い換えると一つの表情だけで、多面的な情動変化を描くに長けた作家でもあります。それは、日本における浄瑠璃人形劇で瞬きや目の動き、人形の所作、能楽における能面の傾きやライティングによる陰影作りによって見せる複雑な人間の情念を描く表現に近いものがあると直感的に感じており、彼女の技法と日本の伝統芸能から着想を得て、私自身が新たなアニメーションの技法を生み出すことを留学中の目標と定めていました。



画像 1 (「ケアン」の首達)の表情変化)

英国滞在中は、残念ながら様々な要因が重なり国外に住むテンプレトンにお会いすることは叶いませんでしたが、当時 RCA の学生だった彼女を指導した教授、並びにアカデミ

一賞受賞作にも携わった技術者に直接インタビューをすることができました。研究成果として、RCAにてグループ展を開催し、これまでの短編作から滞在中に研究を基に制作した映像インスタレーション作品「Breath Blink Sometimes Cry」のプロトタイプを発表しました。



画像2 (スージー・テンブルトン「Peter & Wolf」の映画で実際に使用された人形のリサーチ中の画像。
Royal College of Art Museum 所蔵作品)

【Breath Blink Sometimes Cry (2019) 作品解説: ビデオインスタレーション、1 分間のループ映像の中で、人形は徐々に目の中に光を得て、呼吸を始め、涙を流す一連の動作を繰り返す。不気味の谷の上昇下降を繰り返すように、ある瞬間からそれは物体としての人型から、かぎりなく人間に近い存在へと見ている者の中の認識が移行する。一説によると、人間だけが心理的感情から涙を流すとされているが、それはミラーニューロン効果によって他者の共感を獲得するためと言える。まるで本当に生きている人間のように悲しみを演じる人形は、誘導的に鑑賞者の感情を操作していく。】

他、英国に滞在中で特に恩恵を受けたのは、国際的にも評価の高いクエイ兄弟やシュペラ・カデツら作家のスタジオに直接赴きインタビューをすることができたこと、そして様々な美術展や舞台が毎月のように入れ替わり世界から集結することによって、この短い滞在中に連日のように大量にインプットする機会が設けられたことです。また、自身の研究の傍、実験映画のポール・ブッシュ監督の元でアニメーターとして新作映画に携わったり、オランダの KABOOM 国際映画祭やオーストリアの Tricky Women 国際女性アニメーション映画祭などで私の作品が入選したことで、映画祭開催中に自分の上映に立ち合い、上映後のトークイベントに登壇したり、他の作家達と交流できたことで、様々な国の作家たちや制作現場と横のつながりができました。このように多くの貴重な機会に恵まれたのは、英国と言う美術市場の大きさと近隣国へのアクセスの良さが大きく由来している痛感せざるを得ませんでした。



画像3 (「Breath Blink Sometimes Cry」の作品画像)

現在の活動

帰国後はロンドン滞在時に制作発表した「Blink in the Desert」を3331ART FAIR 2020へ出品し、コレクタープライズ 遠山正道賞、ならびにアートのある暮らし協会賞を受賞しました。その後、本作は「彼女たちは歌う」展 (キュレーター 荒木夏実主催、東京藝術大学陳列館: 2020/8/18-9/6) でも同作が展示され、美術手帖の選ぶ 2020 年ニューカマー・アーティスト100 (2021年2月号) への掲載に繋がりました。

2021年3月には、留学滞在中に研究し、編み出した独自のアニメーション技術を取り入れた新作、「Blink in the Desert」(2021) を完成させ、既に国内外の映画祭での受賞ならびに上映、個展の開催が決定しています。現在は東京藝術大学大学院映像研究科の博士課程後期に進学しており、引き続き立体アニメーションならびに現代美術を中心とした研究と制作活動を行なっています。



画像4 (「Blink in the Desert」の作品画像)

おわりに

留学中は自分が当初定めた研究テーマ以外にも、予想外の場面で多くの経験を得ることができました。私たち美術作家は問題に対して一つの明確な答えを出すのではなく、答えの見つからない問題について「どう向き合っていくか」社会に向けて発信していくことが使命であり、それは日々の予測不可能な出来事に対し関心を持ち、対話の中で「問い」を深めていくことが重要です。コロナ禍で様々な交流が停滞する中、蔓延以前の留学期間中に映画祭で様々な国の作家と実際に出会い、意見を交換し、次の機会へと結ばれていく特別な空間にいられたことは変えがたい経験でした。特に、ロンドン滞在中に同じく2019年度のBCJA奨学生に選出された方々と交流できたこと、普段なかなか接点を持つことの難しい様々な専門分野の方のお話を聞くことができたのはBCJAの奨学制度のお陰であると痛感しています。何より、修士課程の限られた時期にこのような貴重な機会を得られたこと、その後押しとしてご支援くださったBCJA奨学会のみなさまに重ねてお礼申し上げます。

(2019年度BCJA奨学生 Royal College of Art)

2020年度BCJA会計決算報告書

(2019.11.1～2020.10.31)

(一般の部)

収入の部

科 目	金 額
前年度繰越金	△434,395 円
年会費@2,000	70,000 円
合 計	△364,395 円

支出の部

科 目	金 額
ニューズレター	35,200 円
発送費	6,580 円
封筒代	0 円
アルバイト	60,000 円
文具	5,360 円
Web更新費	22,627 円
合 計	129,767 円

2018年10月31日現在の資産状況

次期繰越 (a)	△494,162 円
----------	------------

(BCJA奨学基金の部)

収入の部

科 目	金 額
前年度繰越金	597,601 円
寄付金(26名)	567,000 円
合 計 (b)	1,164,601 円

支出の部

科 目	金 額
奨学金@150,000×5人	750,000 円
振込手数料	11,546 円
小計 (c)	761,546 円

2018年10月31日現在の資産状況

次期繰越 (b-c)	403,055 円
------------	-----------

2020年度BCJA奨学基金趣意書

2021年1月31日

BCJA 会長 青柳昌宏

BCJA奨学基金は、2000年よりBCJA会員の有志の皆さまからの寄付金を基盤として、英国留学生の支援活動を着実に進めてきております。昨年度は、5名の留学希望者に対して、奨学金を授与することができました。

今年度も奨学生の募集を行いますので、奨学基金へのご寄付をお願い申し上げます。

記

一口 5,000 円 二口以上でお願い申し上げます。同封の郵便振込用紙に、振込額、住所、氏名をご記入の上、下記口座宛にお近くの郵便局でお手続きいただければ幸いです。

ご寄附頂きました方々への領収書等の発行は特に致しておりませんが、必要であればご連絡、或いはご寄附の際に振込用紙にその旨、ご記載下さいますようお願い申し上げます。

尚、御礼状に関してはNewsletterにて代えさせていただきますことを御理解下さい。

口座記号番号:00180-0-426794

加入者名:BCJA奨学基金

事務局 島津幸男

〒745-0004 山口県周南市毛利町 3-37-1-612

連絡先 Tel:090-8773-1024 Fax:0834-32-4030

e-mail: shimazu@herb.ocn.ne.jp

BCJA の銀行口座のお知らせ

金融機関名： ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

店番： 019

店名：0一九店(ゼロイチキョウ店)

科目： 当座

口座番号： 0426794

受取人名： BCJA ショウガクキキン

要注意！

総会参加費等、BCJA への振込時、ネットバンキングをご利用の会員の皆様には、次の点をご注意下さい。

振込先： ビーシージェイエー(BCJA)

2019 年度 BCJA 奨学基金協賛者一覧

2020 年 10 月現在

年会費納入者 35 名(7 万円)

奨学金納入者 26 名(56.7 万円)

協賛者氏名 (敬称略 順不同):

長澤 泰	時枝 正	長谷川高宏
稲永清敏	小倉暢之	田中 晋
渡辺素子	岡井清士	小澤 博
新井民夫	島津幸男	河本直紀
難破光義	玉井俊紀	杉浦和朗
西田宏子	白鳥 令	広本勝也
荒木 喬	草間芳樹	平 健臣
斎藤 勉	大谷剛彦	齋藤友博
本吉邦夫	山下 博	池田 修
横山俊夫	加藤久雄	諏訪部仁
桂 文子	石渡淳一	平田富夫
大野吉弘	溝口節子	

BCJA ホームページについて

ホームページ担当

BCJA のホームページ <http://www.bcja.net/> では、過去のニューズレター閲覧、BCJA 英国留学奨学金、BCJA 活動状況、

メンバー向け案内などがご覧になれます。幅広く有益な情報を提供できるサイトにするため、どうぞ皆さまからのご意見、ご希望をお寄せ下さい。

[編集後記]

今回は、BCJA 編集担当の石井様が多忙のため、青柳が編集を代行いたしました。編集に手間取り、出版が大幅に遅くなりまして大変申し訳ございません。2019 年度 BCJA 奨学生 4 名からの留学レポートを中心にまとめさせていただきました。

本レターへの投稿を幅広く募集しております。皆様の留学体験談、研究・事業活動のご紹介、英国との交流事例、最新の英国事情など、英国と日本の交流に関する内容について、よろしくご投稿をお願いいたします。既に原稿をお送りいただき、掲載されました方々にも、続報の投稿をぜひよろしくお願いいたします。また、特集テーマ、原稿依頼先の案、紙面構成、編集方針などのご意見も積極的に寄せいただければ幸いです。

なお、本レター発送については、いつも会計担当の島津様にご協力いただいております。この場を借りて、心より感謝いたします。